

## 主権者として映画人として

想田和弘 映画監督

日本学術会議が推薦した会員候補のうち6人の学者が、菅政権によって任命拒否された問題で、映画人有志で首相に抗議声明を出そうという誘いを受けたとき、僕は間髪入れずに賛同しました。

### 不安よぎったが

同時に不安も頭をよぎりました。菅政権が、安倍前政権と同じような発想で政権運営をするなら、反対意見を述べる僕は「敵」に認定されかねない。抗議声明に名を連ね、首相を公に批判することで、今回、任命拒否された学者たちと同じような有形無形の不利益を被るのではないかと。



しかし、そうした懸念がよぎること自体が言論の自由にとって非常に良くないことです。学者だけでなく日本国民全般に政府批判を控えさせる萎縮効果を、菅政権は狙っている気がします。だからこそ、声をあげないわけにはいかない。言論の自由への侵害だと表明しておく必要があるのです。

首相は官房長官時代、会見で記者の質問に対して「まったく問題はない」「その指摘はあたらない」と紋切り型で逃げてきました。しかし、会見と違って質問回数に制限のない国会論戦ではそうはいきません。首相が任命拒否をしたのは、やはり学者たちの、安保法制や「共謀罪法」にかかわる言動以外に考えられないことが、首相の支離滅裂な答弁からよく分かりました。

ただ、学術会議の任命拒否の影響を、日々の生活で実感する人は現時点では多くはないというのが、僕の冷静な認識です。そこにつけこんで、政権側の人々によって、「エリート学者という特権階級に対する税金の使い方の問題」にすり替えられています。

### だまされない目

「ディスインフォメーション」といって、人々を真実から目をそらさせ、世論をゆがめるために、虚偽の情報を意図的に流布するという手法が、今回の問題でも使われています。そのことを国民が共有して、だまされないよう用心する必要があると思います。

僕が声をあげたのは、主権者の1人として、1億分の1の責任を果たしたいとの気持ちからです。いまは学者がターゲットになっていますが、それが映画人に向かうのは時

間の問題です。そして次は、とを考えてください。民主主義の成立は一人一人の主権者の積極的な参加にかかっています。

聞き手・武田恵子

そうだ・かずひろ 1970年生まれ。「観察映画」と呼ばれる手法でドキュメンタリー「精神0」などを監督。

しんぶん赤旗 電子版 2020年11月19日【1面】